

「香港中文大学サマープログラム参加報告書」

京都大学文学部 三回生 今岡 哲哉

1. 学校生活について

香港中文大学では、週末を除き朝九時半から夕方五時まで毎日授業があった。山を丸ごと切り拓いた土地に大学は位置しており、宿舎から授業棟までは毎日バスで移動した。授業は午前中に文法と読解を学び、二時間半ほどの昼休みを経て、午後は発話と聴解を中心に教わった。クラスはレベル別に三つあり、私は中間のレベルに所属していた。難易度は自分の現時点での能力を少し超える程度で、ちょうど良いように思った。

寮生活を振り返ると、京大や他大学の学生との交流は楽しかった反面、寮の設備面には納得がいかない部分もあった。シャワースペースは常に清潔だったとは言い難く、恐らく百人以上は滞在していた寮全体の中で、乾燥機は片手で数えられるほどしかなかったし、一つは故障したまま放置されていた。ただし、こうした環境も一つの体験だと思える胆力があれば、特に不満が募ることもない。

2. 授業外の過ごし方について

折角香港に来たからには、授業が忙しかろうとも、香港の街中に繰り出したくなるのが人情である。私は特に食べるのが好きなので、昼休みにメトロで移動して飲茶を楽しんだり、放課後に隣駅の粥店まで足繁く通ったりした。

また、土曜日には香港中文大学の学生たちがツアーを開催し、香港を案内してくれた。海や山を見渡せる長いロープウェイに乗ったのは楽しかったが、一方で現地の人に早口言葉を話しかけよと指令が出て、戸惑う場面もあった。

残る日曜日には、京大のメンバーでマカオに行ったほか、他大学の学生と一緒に近郊の都市に出かけた。広州で時間に追われて立ちながら食べたエビ餃子の味や、桂林の現地ツアーで筏から眺めた山水風景は、私の知覚の奥深くに残り続けるだろう。

3. プログラムを終えて

ある程度の海外経験はあったので、新しい事柄に眩しさを覚える回数は比較的少なかった。しかし、今回のプログラムに参加して、私は教室で一学期分だけ習ったにすぎない中国語を、一つのアクチュアルな道具として使う勇気を手に入れることができた。今年の終わりくらいには、HSKを受験してみる予定である。また、今後の進路は就職を考えているが、今回の留学経験を踏まえ

<事務局使用欄> 受付番号：

-

て、今後の長い社会人暮らしで中国に住んでみたいと思うようになった。